

千葉県衛生研究所 情報

Health 21

この情報誌は、公衆衛生に関する身近な話題、情報をお知らせするものです。

——目次——

◎ 健康づくりと衛生研究所	副技監 川口清二郎	1
◎ ダイエット用健康食品による健康被害について	医薬品研究室 長谷川貴志	2
◎ 感染症発生動向調査におけるウイルスの分離・検出	ウイルス研究室 小川知子	3

健康づくりと衛生研究所

近年、SARS、高病原性鳥インフルエンザ、ウエストナイル熱等の感染症発生動向に日本中が注目しており、その国内での発生監視体制、発生時の被害拡大防止等健康危機管理の整備強化が進められております。幸いSARSやウエストナイル熱の国内での発生は確認されておられません。しかし、海外においてはアメリカでのウエストナイル熱、ベトナム・カンボジアにおける高病原性鳥インフルエンザ、コンゴ共和国でのエボラ出血熱、アンゴラでのマールブルグ病やコレラ、ポリオ等私たちが脅かす感染症の発生が日常的に報告されております。国内においても6月に茨城県の養鶏場で高病原性鳥インフルエンザの発生が確認されましたが、幸い高病原性鳥インフルエンザH5亜型のうち病原性の弱い株であったことと速やかな対応により大事には至っておりませんが健康危機管理の重要性が再認識されております。

平成6年に施行されました地域保健法の見直しに向けた地域保健対策検討会の中間報告において健康危機管理対策の重要性が挙げられており、地方衛生研究所に対しては、地域及び広域における健康危機管理の科学的・技術的中核としての機能を要求しております。広域の感染症や重大な健康危機に迅速に対応するためには、近隣各都道府県とも平時からの密接な連携体制の構築が重要であり、関東信越ブロックにおいても健康危機管理連絡協議会が立ち上が

千葉県衛生研究所副技監 川口清二郎
 ったところでは健康福祉部内メーリングリストにより感染症情報を共有しているところですが、一部の病原体については遺伝子情報を発信し、疫学情報をリンクさせることにより感染症の予防に寄与しています。

「21世紀における国民健康づくり運動（健康日本21）」が平成12年に始まり5年が経過し、中間評価を通じた1次予防施策の見直し・重点化が進められています。

少子・高齢社会において、県民の健康志向は一層高まり、健康に関するニーズは多様化しております。県民の健康水準は著しく向上している反面、がん、心疾患、脳血管障害などの生活習慣病は増加しています。地域保健法の施行から10年を経た現在、地域保健における現状と課題において、健康課題の精査・原因究明が不十分、健康課題解決の具体的な方策の検討の欠如、地域保健対策への住民の主体的な参加の欠如、地域住民への説明や情報公開が不十分、市町村への技術的支援の高度化等が検討会の中間報告で挙げられております。

千葉県保健医療計画では、健康づくり総合支援システムにおける衛生研究所の機能として、地域保健関係者に対する研修の充実、情報の収集・整理・活用の推進を謳っています。

衛生研究所では、平成15年度に健康疫学研究室を新設し、感染症以外の健康にかかわる問題につい

ての疫学調査、健康関連情報の収集・解析・提供を行い県民の健康増進に寄与してきました。今後は、県民ニーズをより正確に把握し、健康福祉に関する情報を幅広く調査・収集し、目的に応じてより正確に解析し、「最新の情報を」「正確に」「わかりやすく」提供することにより、県民一人ひとりが健康について正しく理解し、自ら健康づくりに取り組むことができるよう支援する一方、市町村等に対しては情報の

提供をはじめ、地域が持つ情報の解析技法や健康疫学に関する最新情報等地域保健関係者の資質の向上を目指した研修等を通じて地域保健事業の企画立案・事業評価の支援をすることとしております。

千葉県衛生研究所では健康危機管理とともに地域の健康づくりの中核としての機能強化を推進していくこととしております。

ダイエット用健康食品による健康被害について

近年ダイエットに対する関心は非常に高く、様々なダイエット方法が雑誌やテレビ、インターネット等で紹介されています。そのなかで、気軽に痩せることができるという認識から、ダイエット用健康食品が幅広く利用されています。健康食品は、薬事法に基づき有効性（効能効果）や安全性が評価された医薬品とは異なり、薬のような効果は期待できません。しかし、健康食品のなかには、より効果を高めようと違法に医薬品成分を添加したものがみられ、それらの健康食品によると思われる健康被害事例が数多く報告されています。平成14年7月にはN-ニトロソフェンフルラミン、フェンフルラミン、甲状腺ホルモン等の医薬品成分が含有されていた中国製ダイエット用健康食品により、3人の死亡者を含む大規模な健康被害が発生しました。また、この事件以降も同様の健康被害事例は後を絶たず、厚生労働省の発表によると、健康被害事例は約800件（平成14年～平成17年6月29日現在）に達しています。

今年の5月に発生した健康被害について

今年の5月には天天素 清脂胶囊(てんてんそ せいしこうのう)による健康被害が発生し、死亡者1人を含む122人（平成17年6月29日現在）が健康被害を受けました。この製品について検査を行ったところ、医薬品成分であるマジンドール、シブトラミン、フェノールフタレイン等が検出されました。

マジンドールは麻薬及び向精神薬取締法で規制されている向精神薬で、食欲抑制作用があり、食事療法や運動療法の効果が不十分な高度肥満症に対して用いられます。副作用としては口渇、便秘、悪心・

嘔吐、睡眠障害、胃部不快感等が挙げられ、重大な副作用としては依存性や肺高血圧症があります。用量は成人で0.5mg～1.5mg/日で、できる限り最小有効量を用いるとされており、医師の管理のもとで慎重に使う必要があります。シブトラミン

は日本では承認されていない医薬品で、中枢性食欲抑制作用があり、海外では肥満症治療剤として用いられています。副作用としては血圧上昇、心拍数増加、頭痛、口渇、便秘、鼻炎等があり、用量は1日10mgで最大15mgまでとされています。フェノールフタレインは学生時代に理科の実験等でpH指示薬として使ったことがあるという方も多いのではないでしょうか。医薬品としては、以前下剤として使用されていましたが、昭和46年以降は日本薬局方から削除され、現在では使われていません。平成9年には米国FDA（食品医薬品局）が、動物実験による発ガン性を報告しています。下剤としての用量は100～300mg/日といわれています。天天素の説明書には「毎朝、食前30分に1錠を服用してください」と記載されていました。説明書の通り服用する



天天素 清脂胶囊
(厚生労働省のホームページより)

と、1日当たりいずれの成分も有効量に匹敵するほどの量が含有されていました。

このように健康食品の中には違法に医薬品成分を混入させたものがあります。「飲むだけで簡単にダイエットができる」等のうまい話には、危険が潜んでいる場合があるので注意が必要です。

個人輸入にご用心

最近では、中国製に限らず個人輸入により入手した健康食品によると疑われる健康被害も多く発生し

ています。日本では食品に使用できない成分を含有する製品が、「サプリメント」や「健康食品」として一部の個人輸入代行業者やインターネットオークション等を通じて販売されています。個人輸入した製品によるトラブル等は、国内法の規制が及ばないものもあるため自己責任となる場合があります。購入する際には注意してください。

(医薬品研究室 長谷川貴志)

感染症発生動向調査におけるウイルスの分離・検出

ウイルス研究室の業務の大きな柱の一つに感染症発生動向調査があります。この感染症発生動向調査は、患者発生状況と病原体動向の2つの体系から成り立っており、ウイルス研究室は病原体定点から集められた検体よりウイルスの分離・検出という病原体動向の部分を担当しています。

病原体定点は県内に、基幹定点8医療機関、小児科定点13医療機関、インフルエンザ定点21医療機関、眼科定点3医療機関があり、2004年度は約430検体の鼻・咽頭ぬぐい液、便、髄液等が採取され検査を実施しました。その結果については、図1に月別の分離・検出数を示しました。

2004年度は5月～7月にかけてアデノウイルス、エンテロウイルスを多く分離し、2004年11月～翌年の3月はA/H3型およびB型インフルエンザウイルスを多く分離しています。また、ノロウイルス、サポウイルス、ロタウイルスも冬季から春にかけて多く検出されています。このようにウイルスの流行には季節性があります。全体的に見て暑い夏よりも冬季～春にかけて活動が活発になるウイルスの方が多いようです。

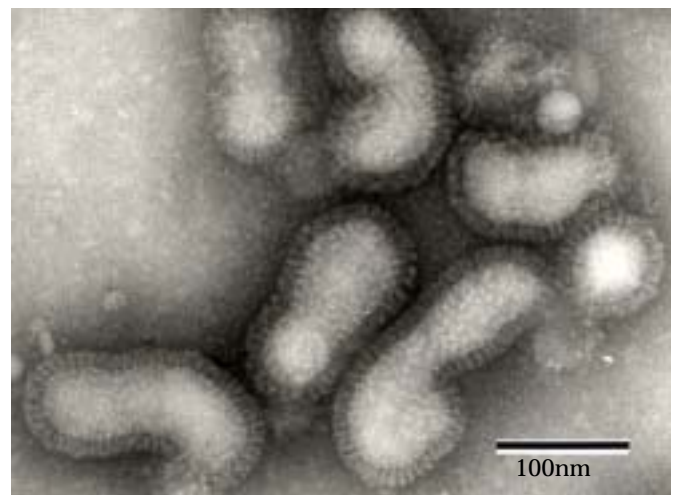
ウイルスの検査は通常培養細胞を用いたウイルス分離を行います。培養細胞で増殖しないもの、増殖するものの細胞を選ぶもの、増殖速度の速いもの、遅いもの等、様々です。またそれらのウイルスの多くは、多くの遺伝子型・血清型を有し、検体に対してどのような検査をしたら良いかという最初の絞り込みが重要になってきます。さらに近年普及している検査法にPCR（遺伝子増幅法）がありますが、検

出する目的のウイルスに対して1つの検査系が必要になります。

ヒトのインフルエンザの診断を受けた検体を例にとるならば、A/H3型、A/H1型、B型（必要に応じてN1型、N2型）に対するPCR、ウイルス分離・同定、ワクチン株との比較が一連の検査となります。このように複数の検査を組み合わせることで確実な信頼性のある結果を出しているのです。

このようにして出された結果は、保健所を通して依頼された病原体定点に返すとともに、衛生研究所内にある基幹感染症情報センターと国立感染症研究所の中央感染症情報センターに送られます。

さらに、感染症流行予測事業での抗体検査のデータや集団発生とのデータとともに、中央感染症情報センターで解析され公衆衛生上重要な情報となります。 (ウイルス研究室 小川知子)



インフルエンザウイルスの電子顕微鏡写真

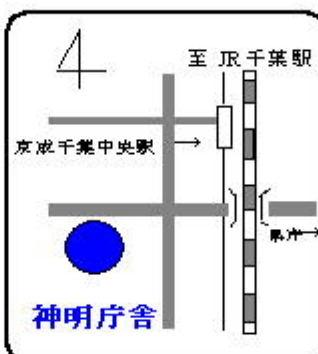
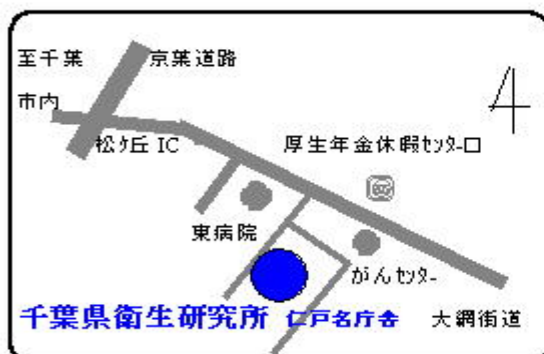
図1 2004年度月別分離・検出ウイルス

検出ウイルス	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
A型インフルエンザウイルス(H3)								4	9	14	23	5	55
B型インフルエンザウイルス										17	46	7	70
アデノウイルス 未同定		1											1
アデノウイルス 1型			5	3									8
アデノウイルス 2型			2	1									3
アデノウイルス 3型		1	8	1	1								11
アデノウイルス 4型			2	4									6
アデノウイルス 40/41型	1												1
ピコルナウイルス 未同定		1							1				2
コクサッキーウイルス A2型				1									1
コクサッキーウイルス B1型	1			2	1								4
コクサッキーウイルス B3型								1					1
エコーウイルス 3型					1								1
エコーウイルス 7型		1		1									2
エコーウイルス 16型	1												1
エコーウイルス 18型			1										1
エコーウイルス 30型						2							2
RSウイルス	1												1
ムンプスウイルス					1								1
麻疹ウイルス		1											1
水痘-帯状疱疹ウイルス			2										2
サイトメガロウイルス			1										1
ヒトヘルペスウイルス 6型			1	1			1						3
ヒトヘルペスウイルス 7型			1									1	2
EBウイルス			1										1
デングウイルス											1		
A群ロタウイルス	6							2		2	8		18
ノロウイルス(G)									6	4	1		11
サボウイルス	3	1		1						1	1		7
計	13	6	24	15	4	2	1	7	16	38	79	13	218

* 血清学的検査により感染を確認

千葉県衛生研究所ホームページ http://www.pref.chiba.jp/syozoku/c_eiken/index.html

千葉県感染症情報センターホームページ <http://www.phlchiba-ekigaku.org>



Health 21 No.13
 千葉県衛生研究所情報 2005.9.1
 編集・発行：千葉県衛生研究所情報誌
 編集委員会
 事務局：感染症学研究室
 260-8715 千葉市中央区仁戸名町 666-2
 Tel:043-266-6723 Fax: 043-265-5544